

次の文章は、朽木祥『光のうつしえ 広島ヒロシマ広島』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

※ 設問の都合により、本文の一部に改変があります。

舞台は一九七〇年頃の広島。主人公・希未は美術部の中学一年生で、文化祭で原爆の体験談を取材して作品にすることになり、入院中の顧問・吉岡先生にその報告をしました。始まりの□□で囲われた部分は、その後吉岡先生から生徒たちに届いた手紙の文です。

君たちは、「無辜の民」という言葉を聞いたことがありますか。

第二次世界大戦は「無辜の民」が巻きこまれ大変な数犠牲になった、初めての戦争だと言われています。

正しい戦争というようなものはありませんが、それでもやはり最低限のルールのようなものはあって、女、子ども、老人など一般の罪もない市民は巻きこまないで戦うというのがそれでした。「無辜の民」というのは、この「罪もない市民」のことをいいます。「非戦闘員」とも言い換えられるかもしれませんが。

広島では、市がまるごと焼かれて、恐ろしい数の市民が犠牲になりました。このことを、君たちは小学校のときからくりかえし教えられてきましたね。いまだに正確な数はわかっていませんが、一瞬で七万人以上が亡くなり、その年の終わりまでに亡くなった人は合わせて十四万人と言われています。

いやしくも教える立場でありながら恥ずかしい限りですが、八月六日の朝以来、私が考え続けてきたのは、消えてしまった広島のことばかり、帰ってこない人のことばかり、自分のことばかりでした。大切な人を奪われた怒りをどうすることもなく抱えていたのです。

しかし、無辜の民が犠牲になったのは広島だけではありませんでした。各都市へのすさまじい空襲がくりかえされて、東京大空襲では十万人もの無辜の民が犠牲になりました。沖縄戦では学徒をはじめ多くの民間人がむごたしく殺されました。

そして、無辜の民が犠牲になったのは日本ばかりではありません。たとえばロシアのレニングラードでは、市民が飢餓戦に引きこまれ九十万人が飢えて亡くなりました。イタリアやポーランドでも村中の人びとが教会にとじこめられて焼き殺されたり、町がまるごと焼き払われました。中国をはじめアジアの国々でも、罪のない市民が数えきれないほど犠牲になりました。迫害を受けたユダヤ人たちについては、君たちも勉強したことがあるでしょう。この人たちもまた無辜の民でした。大戦中に犠牲になった名もなく罪もない無辜の民は、世界中で膨大な数に上るのです。

にもかかわらず、私は自分が失ったものを嘆けばかりで、戦争が終わって四半世紀近くものあいだ、ひたすら自分だけを哀れんでいました。病を得てようやく立ち止まり、ようやく自分を外から見ることができるようになったのです。

私たち日本人はあの不幸な戦争において、好むと好まざるにかかわらず、加害者に与した結果になりました。また犠牲者ともなりました。私たちの罪も傷も実に大きく深いのです。いったい、どのようにその罪を償い、どのようにその傷を癒していけるのか——これからずっと自分に問いながら生きていかねばなりません。

その答えの一つを、第二次世界大戦、特にホロコーストの研究者たちが訴え続けています。「加害者になるな。犠牲者になるな。そしてなによりも傍観者になるな」と。

省みれば私は、兵士として出征して加害者となり、原爆に遭って犠牲者ともなり、戦争が終わってから四半世紀ものあいだ傍観者でしかありません

でした。

幸いなことに君たちは、まだ加害者でも被害者でもなく、そのいずれに与してもいません。私のような者がもし何か言えるとしたら……：自戒をこめて言うしかないのですが、君たちはどうかこのまま加害者にも被害者にもならないで生きて行ってほしい。そして、決して傍観者にはならず、あの戦争で起きたこと、廣島で起きたことを、伝えて行ってほしい。

ここまで読んで、たとえば「小さな物語を絵にすることで、そんな大きな問題が伝えられるだろうか」と、俊や希未が考えるのが想像できます。

しかし、この世界は小さな物語が集まってできている。それぞれのささやかな日常が、小さいと思える生活が、世界を形作っている——そんなふうには考えています。小さな物語を丁寧に描いていくことこそが、大きな事件を描き出す最も確かな道なのだと思いますか。

文化祭でみんなの絵を見せてもらうことを、心から楽しみにしています。

(中略)

文化祭には美術部員の作品だけではなく、全校生徒からの応募作品もたくさん集まった。希未たちの呼びかけ、「あのころの廣島とヒロシマ…聞いてみよう、あなたの身近な人のあの日のことを」には、思ったより大きな反響があったのである。

展示室に入ってすぐ正面には、あの写真パネルを飾った。かつての輝くような産業奨励館と、明るい顔でそれを見上げる廣島の人のびとの写真である。

文化祭の当日、思いがけない人が展示室に現れた。吉岡先生だ。

みんながわーっと声を上げて、先生を取り囲んだ。

「先生、もう退院？」

「いつから学校に帰ってくるん？」

「色黒いなあ、ほんまに病気じゃったん？」

みんながひとしきり騒ぐのにいちいちうなずいてから、吉岡先生は説明した。「年度末まで休職じゃ。でも、もうちよつとで自宅療養に移れる。今日は特別許可をもらうて来たんじや」

先生は展示のほうを向いた。

「すごい。ようがんばったのう」

それから先生は、作品の一つ一つを丁寧に見て歩いた。

それぞれのヒロシマ——父母や祖父母たちから聞きとったあの日のこと、会ったことのない身内や近隣の人びとの姿——が、さまざまに描き出されていた。ほとんどの作品に短いコメントや説明文がつけてあった。

生徒たちは、身近な人びとの心に深く落ちていた苦しみや悲しみ、あの日までの楽しみや喜びを描こうとしていた。

どの絵にも稚拙だとか上手だとかを超えた思いがこもっているようだった。平和記念資料館に展示されている、被爆者たちが描いた絵のように。

一般公募の展示の真ん中あたりに、**(2)** 耕造の絵があった。縁側で語らう少女たちをクレヨンで描いていた。

真ん中において晴れやかに笑っているのは若い女性である。少女たちはみんなで六人。制服の少女たちは肩をぶつけあうようにして仲良く座っていた。背景の座敷には、戦時下では飾れなかったはずの雛壇らしいものが描いてあった。とうてい上手な絵とは言えなかったし、人間と比べてお雛様がやけに大きい。だが、今にも少女たちの笑い声が聞こえてきそうな、いかにも耕造らしい明るい絵だった。添えてあるのは、あの歌だ。

〈太き骨は先生ならむそのそばに小さきあたまの骨集まれり〉

そしてその下に、「祖父母は毎年、黄色の灯籠一つと桃色の灯籠を六つ流します。女学校の先生だった長女とその教え子の生徒さんたちのためです」と書いてあった。

先生は耕造の不器用な、だが心のこもった絵を長いあいだ見つめた。

美術部員の作品は展示室の半分を占めていたが、絵ばかりでなく、ケロイドの痕のある手の彫塑、ガラスケースに封じこめた破れたブラウスとスカートのカラージュ、つぶした空き缶を黒く塗って組み立てたオブジェなどもあった。俊は絵と彫塑を出していた。二つは並べて展示してあって、タイトルは『廣島とヒロシマの朝』だった。

絵には原爆ドームが描いてあった。画面左上には、銀色の飛行機が小さく描かれていた。青い、青い空を映した元安川が絵を見ている人に向かって流れてくるようなコウズで、手前には橋が架かっている。俊が春からずっと取り組んでいた百号※キャンパスのサイズの大作だ。

先生の手紙を読んだあとで俊が描き加えた部分の一つは、橋の欄干にもたれて空を見上げている三人の姿だった。一人の髪は金色で足には鎖をつけていた。この絵には、俊の知る広島とあの朝の廣島が同じ画面に描いてあるのだ

つた。彫塑は、何度もつぶして、やっと今の形になった。男の子が睡蓮鉢の前にしゃがんで、すくったばかりらしいお椀をこちらに見せて笑っている。先生は、この二つの「ヒロシマの朝」の前にも無言で立ち尽くした。

希未は絵を二枚、出品していた。一枚目は灯籠流しの情景だった。寄りそって流れていく灯籠のあとから、流されるのを待っている白い灯籠。その灯籠を囲んでいるのは希未に面差しのよく似た二人の少女と年配の女性だ。年配の女性が手にしているのは一枚の写真で、少女の一人は胸に文庫本を抱いている。そしてもう一人は筆を持って、今まさに灯籠に名前を入れようとしているところだった。

タイトルは『うつしえの少女』としてあった。この絵にも短歌が書き添えて

あった。

「うつしえに戦死せし子と並びたる少女よいづくに母となりいる 小山ひとみ」
もう一枚には、窓辺から校庭を見下ろして手を振っている人と、振り返ってそれに応えている女の人が描かれていた。女の人は結った髪に櫛を飾っていた。この絵にはコメントや説明はなかったが、タイトルには『お月見の櫛』とあった。

吉岡先生から希未に電話があったのは次の日、文化祭代休の月曜日のことだった。

「この夏、灯籠を流せんかったから、今晚灯籠流しをしようかと思うて……」
希未が聞きかえすより先に、先生が続けた。

「君らの作品は、ほんまによかったね。あれを見たら、これまで自分のことばかり考えてきたような、自分のためにばかり悔やんできたような気がますますしてね、恥ずかしかったよ」

なんとやっていいかわからないで、希未は受話器を握りしめた。

「真の意味で悼む——それができていなかったのかもしれない。ヒロシマのことばかり考えて、ほかの世界のことがまるつきり目に入らなかったのと同じ」
聡子さんとの別れのことを言っているのだと希未にはわかった。でも、「真の意味で」ってどういうことなのだろう。

「……真の意味で悼むって？」

「大切な人の死を受け入れて見送ること、心に刻むこと……」

希未は電話のこちらでうなずいた。四半世紀のあいだ、それができなかった吉岡先生の思いが希未に伝わってきた。

短い沈黙のあとで、先生はまた言った。

「見送って、心にいつまでも刻もうと思う。いなくなった人たちのこと、なんでそんな途方もないことが起きたかということも」

希末は先生の手紙の文言を思い出していた。

「ずっと忘れないでいて伝えていく、っていうこと……?」

「そう。そうできるように祈りながら灯籠を流そうと思う」

先生はふつうの三分の一ほどの大きさの灯籠をいくつか作ったと言った。

「君らのすごい作品に触発されたというわけじゃ」

小さくしたのは、季節外れの灯籠流しで、周辺にあまり迷惑をかけてはいけないと考えたからだという。

「白い灯籠も作った。七つの灯籠も作ったよ。一つだけ、色を違えて。それから月と兎を描いた灯籠も」

慎司さんと、澄ちゃんとその生徒たち、それに聡子さんのための灯籠だ。

「ほんとですか！ 灯籠流し、私も行って?」

「来てくれるんか。俊や耕造にも連絡してくれるか? ほかに来てくれる人がおいたら……」

みなまで聞かずに、希末は「みんな、ぜったい来ます!」と返事をした。そして先生に頼み事をした。もう一つ灯籠を作ってくれるように頼んだのだ。健児くんの灯籠を。

こうしてその夕方、吉岡先生、希末と母、俊と須藤さん、耕造と祖父母は、

季節外れの灯籠流しをするために元安川の畔に集まることになった。

十月の川辺には心地よい風が吹いていたが、日が落ちると少しだけ寒くなった。

冷たい風が先生の体にさわらないかなと希末は心配になったが、希末のお母さんもそう思ったと見えて、「どこかで温かいもんでも……」とあたりを見まわした。

先生はにっこりして断り、ダスターコートのポケットからくしゃくしゃのマフラーを取り出して首に巻き付けた。

みんなは先生からそれぞれ小さな灯籠を受け取った。絵が描いてあるものもカラージュが施してあるものもあった。

耕造と祖父母は七つの灯籠を受け取った。黄色の灯籠にお祖父さんが「澄子」と書いた。残りの灯籠にはお祖母さんと手分けして少女たちの名前を書いた。

「敏子、加奈子、昌子、洋子、昭子、紀子」である。薄紅色の和紙には、それぞれ愛らしいお雛様が描いてあった。

須藤さんは青い灯籠を受け取った。少年が元氣いっぱい跳ねて、こちらを振り返っている絵が描いてあった。

お母さんが受け取った灯籠にだけ絵がなかったが、かすかに銀を散らした白い和紙の灯籠は、たそがれの光のなかでいかにも清々しかった。

名前を書き終わると、みんな川辺に下りていった。

もはやすっかり暗くなり、向こう岸の原爆ドームは、暗い影を川面に落とし、川辺には船着き場のようにしつらえてある木組みがゆらゆら揺れていたが、

その上に小さな灯籠を並べて、吉岡先生が順々に火を点していった。最後に火が点されたのは、白い灯籠だった。先生の手元を見ていた希末の心に、堀田道子さんの手紙の一節が蘇った。

〈……灯籠流しを初めて見たとき、不謹慎に聞こえるかもしれませんが、なん

という美しい慰霊のシユウカンであろうか、と思いましたが。赤や緑の色紙で貼られた灯籠が、ひとたび火を点されると、まるで命を吹きこまれたように内側

から輝いて、この世のものとも思われぬ光をハナちはじめ……〉

堀田さんの書いていた通りだった。それぞれの灯籠は、命があるかのように内から輝きはじめたのだ。

吉岡先生が膝をついて聡子さんの灯籠を流した。須藤さん、耕造の祖父母、希末の母がそれに続いた。

灯籠は、次々と真つ暗な川に滑り出していった。

月と兎の描かれた可憐な灯籠のあとを、はしゃぐようにくるくる回りながら青い灯籠がついていった。

少女たちの灯籠は澄子先生を真ん中に花のように浮かび、愛らしい花の名残を惜しむかのように白い灯籠はゆっくりと流れていった。

「……この世のものとも思われない光をハナちながら、静かに川を下っていききました。まるで、いっしょに旅していく魂のように」

堀田さんの言葉をくりかえし心に鳴らしながら、希未はこの灯籠もまた「うつしえ」の一つのかたちなのだと思った。

旅立っていく人の面影を目にも心にも留めるために——大切な人たちを決して忘れないために——吉岡先生は灯籠を作ったのだ。

問三

——線(1)「小さな物語を丁寧に描いていくことこそが、大きな事件を描き出す最も確かな道なのだ」とありますが、ここでいう1「小さな物語」、2「大きな事件」とはどのようなことですか。

1 「小さな物語」について、2ページ(手紙以外)のことばをつかって答えなさい。

2 「大きな事件」について、「無事の民」「無事」はひらがなで書いてよい」ということばをつかって答えなさい。

問四

——線(2)「耕造の絵」とありますが、耕造(希未の友人)はこの絵を描くことで何を伝えようとしていたと考えられますか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 戦時下でも少女たちを元気づけるためお雛様だけは飾られていたこと。

イ 祖父母は毎年少女たちのために灯籠を六つ流し続けているということ。

ウ 制服の少女たちはどの被爆者たちよりも苦しみながら亡くなっていったこと。

エ 女学校の先生と生徒たちのささやかな日常が戦争によって奪われたこと。

問五

——線(3)「この絵には、俊の知る広島とあの朝の広島が同じ画面に描いてあるのだった」とありますが、この絵には現在の原爆ドーム、原子爆弾を落とすアメリカの爆撃機B 29らしい飛行機、三人の人物が描かれており、その中の一人は捕らえられたアメリカ兵です。この絵にはどのようなねらいがあると考えられますか。説明しなさい。

本文全体における、吉岡先生の変化を次のようにまとめました。空らんにあてはまることばを答えなさい。

問一 線①③のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 ……線A「途方もない」B「たそがれ」の本文中での意味として最も適切なものをそれぞれの選択肢から選び、記号で答えなさい。

A 「途方もない」

ア とんでもない

イ ほかでもない

ウ 予想もつかない

B 「たそがれ」

ア ほとんど真つ暗で何も見えなくなるころ

イ 辺りが薄暗くなりすれ違う人の顔が見えなくなるころ

ウ 月の光で物の姿がくつきりと浮かんで見えるころ

エ 夕焼けに西の空が真つ赤に染まって見えるころ

問六

物語の冒頭の手紙の場面では、吉岡先生は大切な人を戦争で亡くし、

に対して自戒の思いをもっていた。しかし、文化祭で生徒たちの作品を見ることを通して、より一層その気持ちが強くなり恥ずかしさすら感じた吉岡先生はその死を受け入れようとす。

問七

次のA～Gは本文について生徒たちが意見を出し合ったものです。これを読んで、

① ～ ⑤ について後の1～4に答えなさい。

A 絵に添えられた ① には一人一人の物語があつて、哀切極まりない思いが込められていますね。だからそれぞれの物語を持つ、読んだ人の心と詠った人の心が響き合い、深い悲しみや苦しみを共にすることで励まされたり救われたりするんですね。

B 吉岡先生から「真の意味で悼む」ことを「大切な人の死を受け入れて見送ること、心に刻むこと」と言われ、希未はそれを「② ことと受けとめています。ここには、自分が直接知らない人の死も受け入れ心に刻むことへの希未の気つきが読み取れますね。

C つまり真の意味で悼むということは、戦争を経験した人だけではなく、様々な世代の人が受け入れてつないでいくことなんですね。

D 堀田さんが「不謹慎に聞こえるかもしれませんが」と言ったのは、灯籠流しが死者を悼むための儀式であるにもかかわらず、③ と感じたからですね。

E 堀田さんの手紙が蘇った希未には、それぞれの灯籠が命があるかのように輝き始めました。ここには、希未にとって灯籠流しが単なる慰霊ではなく、直接は見知らぬ一人一人の命を目の前に感じ、その死をしっかりと受け入れていることが表れていますね。

F 吉岡先生は希未たちの作品の中に「あの日」まで日常を生き生きと生活していた人の物語を見ました。そして、④ 自分から一歩踏み出すという思いで灯籠を作り始めたんですね。

G 「うつし絵」とは旅立つ人の似姿を心にも目にも留めようとして、影をうつしたのが始まりだとのこと。希未は、⑤ に込めた吉岡先生の「受け入れて見送ること」「心に刻むこと」という思いが、「うつし絵」の伝承に重なると感じて、⑤ を「うつし絵」の一つの形と悟ったんですね。

① に入ることばとして最も適切なものの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア タイトル イ 短歌 ウ 灯籠 エ 手紙 オ 電話

② にあてはまることばを希未のせりふの中から抜き出さなさい。

③ にあてはまることばを本文の中から抜き出さなさい。

④ について。吉岡先生はどのような自分から一歩踏み出すとしたのですか。④ にあてはまるように答えなさい。

— Ⅰ — 次の文章Ⅰ・Ⅱはともに梨木香歩の講演（二〇一五年）の記録『ほん

とうのリーダーのみつけかた増補版』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

※ 設問の都合により、本文に一部省略や改変があります。

Ⅰ

先日、ひさしぶりでヘレン・ケラーの映画『奇跡の人』を見ました。一九六二年公開の映画ですから、今から五十三年以上に作られたということになります。見た人もいるかもしれませんが、話には聞いたこともあるかもしれません。この映画の印象的な場面は、なんとと言っても、耳が聞こえず、目も見えず、口もきけないヘレンが、サリバン先生と出会い、最後にものは名まえがある、ということを理解するところです。ウォーターと言おうとして、ウオ、ウオ、と言いつつ出るところです。そこもほんとうに感動的なのですが、今回、べつのことごとく印象に残りました。

① サリバンさんと出会う前の彼女は、だれともコミュニケーションがとれない、トざされた世界にいたわけですから、まるで動物と同じで、いえ、動物も、群れのなかでマナーのようなものを教わって、そのなかのルールに従って行動するけれども、彼女は、そういう、人と生きる上でのルールのようなものを教わることができなかった。自分の思うようにならないとかんしゃくを起こして手が付けられなくなるので、みな、彼女を刺激しないように接していた。食事のときに椅子に座らないのはもちろん、歩き回って好き勝手にだれかの皿から手づかみで好きなものを取って食べるようなことをしていた。彼女に対する愛情と哀れみと諦めが、結局彼女をためにするんだと言って、サリバン女史は、二人きりで食堂にこもり、何時間もの凄まじい取っ組み合いの末、とうとう彼女に椅子に座ってスプーンを持たせ、ナプキンをとたむことをさせるのに成功した。はらはらしながら外で待っていた母親は、彼女がナプキンをとたんだ、と

聞いて、感動のあまり涙ぐみます。あの子が、ナプキンを、たたんだ、と、何か繰り返して口にします。これもほんとうに感動的でした。母親のそれまでの不安と悲しみまで一度に押し寄せ、ああ、このひとは、たった一人で社会を相手に我が子を守ろうと頑張ってきたのだな、とわかるのです。ナプキンをたたむなんて、言ってみれば、どうでもいいようなことです。けれど、今まで獣の世界にいた我が子が、ここで、自分たちの群れに帰ってきた、そんな感動が、伝わってくるんですね。群れの一員としてやっていけるかもしれない、という微かな光が見えた瞬間でした。群れに入れない、入れる、それがこんなに絶望と希望を与えるものだということ。理屈ではなく、人間の本能のようなどで、それは生死を分けるようなものなのでしょう。個人の主義主張とは関係なく、それは、もう、どうしようもなく。

ですから、みなさんのなかで、一匹狼でやっていけない自分、仲間に入れてもらおうと卑屈になる自分、ということに嫌気がさしているひとがいたとしたら、仲間に入れてもらいたいと思う気持ちは、あたりまえのことなのだと伝えたいです。それは、私たちの本能なのだから、と。

問題は、それが自分のほんとうに入りたい「群れ」や仲間でないのに、そういう人間の本能に急かされて、犬が上位の犬の機嫌をとろうとしてお腹を見せてひっくり返るような行動をとってしまうときの、自己嫌悪感、ですね。

まず言えるのは、生きるってそういう葛藤の連続ってこと。心から思っている言葉でないこと、相手を褒めるときも、自分がそう思っていたらいいんだけど、思ってもないのに、つい、相手の機嫌をとるようなことを言ってしまう、やってしまったときの問題。

② そういう自己嫌悪に陥ってしまったら、それは若い頃はありがちなことなので、ああ、やっちゃったよー、しようがないなあ、って、心のなかでためいき

をついていければいいのです。まあ、しかたがないです。

でも、それはだれにもわからない。それがわかっているのは、あなたしかいません。あなたのなかで、自分を見ている目がある。いちばん大切にしないといけないのは、そしてある意味で、いちばん見栄を張らないといけないのは、いかつこしないといけないのは、じつは、他人の目ではなく、この、自分のなかの目です。

さて、ここから大切なことです。

そのとき、ああ、やってしまったよーとか、しようがないなあ、とか、ためいきついているひとはだれ？

だれよりもあなたの事情をよく知っている。両親よりも、友だちよりも、いわんや先生たちよりもあなたのことをすべて知っている。あなたが、そういうことをせざるをえなかった、あなたの人生の歴史についてもだれよりも知っている。しかも、あなたの味方。いつだって、あなたの側に立って考えてくれている。

そう。あなたの、ほんとうのリーダーは、そのひとなんです。

それはさつき私が言った、「自分のなかの目」、でもあります。同じひとです。そのひとにびったりついていけばいい。

自分のなかの、埋もれているリーダーを掘り起こす、という作業。それは、あなたと、あなた自身のリーダーを一つの群れにしてしまう作業です。チーム・自分。こんな最強の群れはない。これ以上にあなたを安定させるリーダーはいない。これは、個人、ということですよ。

そして、群れというのは本来、そういう個人が一人ひとりの考えで集まってきたものであるべきだと思っています。個人的な群れ、社会的な群れ、様ざ

まな群れがありますが、それに所属する前に、個人として存在すること。盲目的に相手に自分を明け渡さず、考えることができる個人。

じゃあ、どうやったら個人でいつづけられるか。自分のなかに自分のリーダーを掘り起こすって、どうやって？

一つには、自分でも受け容れ難いことをやってしまったとき、ああ、やっちゃったよーとか、自分を客観視する癖をつけることです。批判する力をつける。様ざまに批判する力をつけるなかで、自分自身にももちろん、批判する目を向ける。批判って、難癖をつけるとか、文句ばかり言う、ということとは違います。正しい批判精神を失った社会は、**ボウソウ**していきます。批判することは、もつとよくなるはずと、理想を持っているからできること。社会を愛する気持ちと反対のものではないのです。客観的な目を持つ。つまり、そういう視点から自分をも見つめる、筋肉のようなものをつける。その目は自分をよく見ているから、自分にできないような無理な要求はしない。ちよつと頑張ったらできはず、という線が引ける。頻繁にそういうことをしているうちに、それはできます。それを意識するということがつまり、今言うところの、掘り起こす、という意味。そしてその目が、あなたのリーダー的役割をするものになる。

II

鶴見俊輔さんのお話から

京都のある老舗のパン屋さんの創業者、ご家族の一人が、召集され、軍隊に入りました。仮にAさんとしましょう。Aさんは初年兵として、他の初年兵たちと同じようにある**クレン**を受けます。それは、スパイだとされた中国人が捕虜となり、木に括りつけられているのを、銃剣で順番に、一人ひとり突いていく、という、残酷な行為です。生身の人間を刺す、という度胸をつけさせるためだということです。そう、とんでもないことですよ。あつてはならないこ

と。落ちていて考えたらだれでもわかる。でも、上官の命令のもので、ここで(4)も同調圧力が生じたんでしよう。それも非常時の同調圧力というとしてつもない力を持ったものが、一人ひとり、言われた通り刺していつて、とうとうAさんの番がきた。

(中略)

Aさんは命令が下ったとき、その場を動かなかった。前の晩、Aさんは、もしそういうことになったらどうしようと考えた末、「殺人現場に出る、しかし殺さない」と決心していた。で、命令に従わなかったAさんは、蹴られたり銃床で突かれたりし、もう一人、命令に従わなかった初年兵——この方は禅僧だったのだそうです——と二人、その晩軍靴を口にくわえさせられ、犬のように四つん這いになって雪のなかを這い回るように命ぜられたのだそうです。犬にも劣る、という意味で。

(中略)

Aさんは英雄じゃない。英雄だったら、そこでこんなことはやめると叫び、その中国人を助けて、でもその場で本人が銃殺刑になったかもしれない。Aさんはそれはできなかった。言われた通り、その場には出た。でも、それ以上はしなかった。ここまではする。でもそれ以上はしない。これ以上はしてはいけない。やってしまったら、そこであなたのなかの「自分」ということの連続性が切れてしまう。それは魂の存続の危機。「それ以上はやるな」。おそらくこれは、Aさんのなかのリーダーの声。ギリギリで発せられた魂の声。

そういう声と会話するためには、批判精神を持ち、埋もれている魂を掘り起こしてリーダーとして機能させないといけない。そのためには、まずは自分自身で考える、ということが大切です。

自分で考えるためには、そのための材料が必要です。その材料となる情報をまず、摂取しなければなりません。でもその情報もすべて鵜呑みにするのでな

く、自分で真剣に向き合って、おかしいと思ったらこれはおかしいんじゃないか、と、疑問に思わなければならない、そういう時代になりました。つまり、その情報が出てきたところの事情を想像する力もつけなければならない。

(中略)

疑問を持ったら、人は不安になります。「え？」と思った瞬間から、(5)から外れる予感が芽生えるからです。それは動物本能的に人を不安にする。だから無意識に疑問を持たないようにしようとする機能が働く。

でも、「え？」と思ったことを大切にしましょう。すぐその場で反対を表明できる勇気がなくても、です。疑問に思ったこと、そして明らかにおかしいと思ったこと。それは「チーム・自分」の抱える課題となります。

問一 線①③のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 映画『奇跡の人』について語っている一節の内容にあてはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ヘレンに起こった奇跡を「群れに帰ってきた」ということばで言い表したのは、ヘレンの母親だった。

イ ヘレンの家族は自分たちだけではヘレンに人間らしい生活をさせることは困難だと思っていた。

ウ サリバンは、ヘレンの家族がヘレンを嫌って遠ざけたからヘレンがわがままに育ったのだと考えた。

エ ヘレンがナプキンをたたんだくらいでヘレンの母親が涙ぐんで見せたのは、本心から喜んだのではなかった。

問三

線(1)「仲間に入れてもらいたいと思う気持ちは、あたりまえのことなのだ」と伝えたのです。それは、私たちの本能なのだから、と」とありますが、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

問四

- ア 群れは生きるために必要で、群れから絶対に外れてはいけない。
- イ 群れに入るかどうかは生死を分けるほどの重要な問題である。
- ウ 群れから外された時のはずかしさは誰にとつてもたえがたい。
- エ 群れのリーダーになりたいと願う気持ちだが、人間には生まれながらに備わっている。

——線(2)「ああ、やっちゃったよー、しようがないなあ、って、心のなかでためいきをついていればいいのです」とありますが、それはなぜですか。次の□にあてはまることばを、この後の文中から三字で抜き出さない。

それが自分を□することにつながるから。

問五

——線(3)「自分のなかに自分のリーダーを掘り起こすって、どうやって？」とありますが、「他の人のなかに」でなく「自分のなかに」とあるのはなぜですか。答えなさい。

問六

——線(4)「同調圧力が生じた」とありますが、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 集団の中で強い存在や多数派に合わせるよう目に見えない力が働き、他と異なる考えや行動をとりづらくなった。
- イ 過去のやり方を守るばかりで新しい考え方をつくりだそうとはせず、前例にないことは認められなかった。
- ウ 自分自身が先入観や固定観念に縛られていてことに気づかず、人の忠告に耳を貸せなくなっていた。
- エ 物事を多角的に深く考え込んでしまい、ぐずぐずと迷うために素早い決断や対応がとれなくなかった。

問七

(5) □にあてはまることばを文章Iから抜き出さない。

問八

——線(6)「チーム・自分」とはどのようなことですか。文章Iの中のことばをつかって三十字以内で説明しなさい。

問九

次の図は本書『ほんとうのリーダーのみつけかた 増補版』の表紙です。表紙の絵は本文の内容とつながりがあるとすると、どのような様子を描いたものだと考えられますか。答えなさい。



画＝ひろせへに

カバーデザイン＝後藤葉子

試験会場の机の上にある
シールを1枚ここに貼ります



242110

受験番号

--	--	--	--	--

氏名

--

2024K-②

①	問一	一
②		
③		
		ち

A	問二
B	

2	1	問三

	問四
--	----

					問五

1	問七
⑤	

2	②

3	③

4	④

①	問一	二
ざ		
さ		
され		
た		
②		
③		

	問六
--	----

	問七
--	----

			問八

	問九
--	----

	問二
--	----

	問三
--	----

	問四
--	----

	問五
--	----

